

## ■ 書 評



チャレンジング行動から認知症の人の世界を理解する  
—BPSDからのパラダイム転換と認知行動療法に基づく新しいケア—

イアン・アンドリュー・ジェームズ 著  
山中克夫 監訳  
星和書店  
2016年3月 216頁  
本体価格 2,300円+税

原作者イアン・ジェームズはイギリスのニューキャッスル・チャレンジング行動臨床チーム(NCBT)の代表を務める臨床心理士であり、2010年にCognitive Behavioural Therapy with older peopleを出版した。それをさらに認知症に特化させ、認知症介護を指導する立場の臨床心理士のための入門書として今回出版された。

タイトルで使われている“チャレンジング行動”という言葉は聞き慣れないが、いわゆる認知症の行動・心理症状(BPSD)と同義語である。BPSDは介護者からみた認知症患者にみられる周辺症状であるが、認知症患者の立場からみると、認知機能の障害による困った状況を乗り越え解決しようと努力している結果として現れた「行動」ともとらえることができる。パーソンセンタード・ケアの考えに基づけば、“チャレンジング行動”の方が適切なかもしれない。

この本は、8章から構成され、第1章はチャレンジング行動の定義、特徴、マネジメントの概要、第2章ではこのチャレンジング行動が生じる原因を生物学的、心理的、社会的要因に分けて、その評価方法に触れている。第3章では、向精神薬による薬物療法を紹介しているが、有効性を支持するエビデンスは得られておらず、第一選択肢として心理的療法を含めた非薬物療法的アプローチの詳細を第4章で説明している。しかし、非薬物療法の効果を検証する論文はあるものの、現段階ではメタ解析を通して有効であると結論づけるまでには至っていない。第5章では、チャレンジ

ング行動に特化した認知行動理論に基づく概念モデルをいくつか紹介したあとで、第6章では、著者が実施しているNCBTの詳細を図表を織り交ぜて解説している。

評者は認知症診療に携わっているが、家族から様々な質問を受ける。患者および家族が知りたい質問には、認知症に対しての一般的な知識とその治療に関することは当然あるが、チャレンジング行動への対応も多い。医師ができることは薬物療法が中心となり、それには副作用が伴い、行動を抑えるにも限界がある。医師は介護に直接携わっておらず、非薬物療法に対するアドバイスも一般的な内容に限られてしまうのが現状である。日々介護をしている家族にとっては、チャレンジング行動は切実なる問題であり、医師の回答で満足しているとは思えない。その対応を介護専門職にすべて押し付けてしまう後ろめたさもある。本書では、患者の視点に立つことを前提に、チャレンジング行動が現れる患者背景に関する情報収集と機能的アセスメントによるアプローチを紹介している。具体的には、認知・神経学的機能の状態、知覚障害を含めた身体面の状態、薬の影響に加え、患者を取り巻く社会的環境、病前性格や本人の物事のとらえ方を知り、その後、どのような状況でチャレンジング行動が賦活されるかを評価する。

病気を理解することにとどまらず、ライフストーリーを聞きだすことで包括的に患者を理解することに努める。至って当然のことであるが、なかなかできない。可能性のある原因が同定できれば、計画を立案し、実際に介入する手順となっている。第7章で、4つの異なったチャレンジング行動がみられる事例を具体的にわかりやすく提示しており、明日からの診療に役に立つような工夫がなされている。

本書を一読することで、今までと違った角度から患者や家族の話を聴取でき、チャレンジング行動に関するアドバイスができるであろう。認知症診療の質の向上にもつながるため、介護者のみならず、医師や看護師にもお勧めしたい一冊である。ただ、著者も指摘しているように、日本の文化に即した変更が必要であり、将来より良い方法に発展していくことを期待する。

(忽滑谷和孝)